

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリストオスか みよ、なんぢはじゅうじか にてしを  
 神 爾 十 字 架 死  
 ほろぼし、とうぞくのた めにらくえんをひ  
 滅 盗 賊 爲 樂 園 開  
 ら き、けいこうぢよのか なしみをなぐさ  
 攜 香 女 悲 慰  
 め、しとになんぢがふくか つして、せか  
 使 徒 爾 復 活 界  
 いにおおいなるあわれみをたま いしをつたえ  
 大 憐 賜 傳  
 させたま えり。

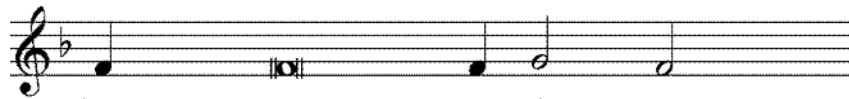
【 神現祭のトロパリ 第1調 】

しゅよ、なんぢがイオルダンにせんをうくると  
 主 爾 洗 受 時  
 き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた  
 聖 三者 敬 拜 顯  
 り、けだしちちのこ えなんぢをしょうして  
 蓋 父 聲 爾 證  
 しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた  
 至 愛 子 名 聖 神 鴿 形

ちにあらわれてことばのたしかなるをしめ  
顯 言 確 示  
 せり、あらわ あ れてせかいをてらし  
現 世界 照  
 しハリスト オスカ みよ、こう え い は なんぢに き  
神 光 榮 爾 歸  
 す。

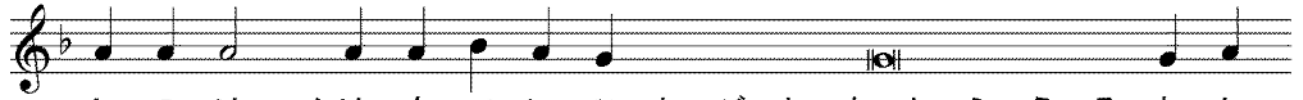
【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
使徒等 同座者 忠  
 じつにしてしんちなるハリスト スのえきしゃ、せい  
實 神智 役者 聖  
 なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
神 撰 笛 愛  
 にみちたるうつわ、わがくにのこう  
満 器 我 國 光  
 しょ お しゃ、あしとしゅきょうせいニコライ  
照 者 亜使徒主教聖  
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
爾 羊 群 爲 及  
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
全世界 爲 生命 賜 聖

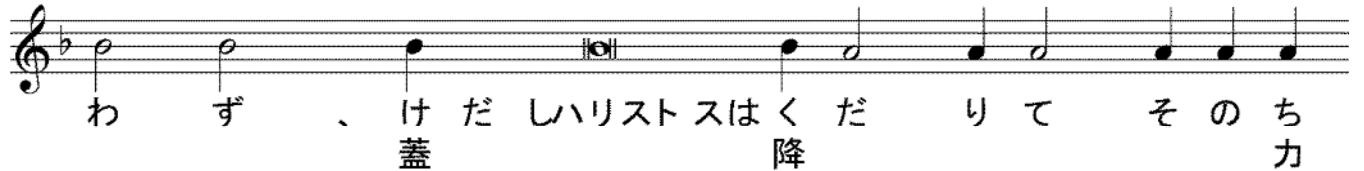


さんしゃにいのりたまえ。  
三者祈給

【 復活のコンダク 第7調 】



しのけんはすでにひとびとをとらうるあた  
死権已人捕能



わず、けだしリストスはくだりてそのち力  
蓋降



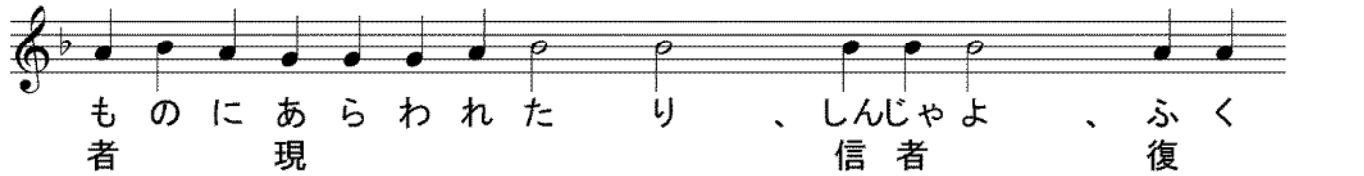
からをやぶりてほろぼしたまえり。ぢご  
敗滅給地獄



くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ  
縛預言者同心喜



こびてよぶ、きゆうせいしゅはしんにおる  
呼救世主信居



ものにあられたり、しんじゃよ、ふく  
者現信者復

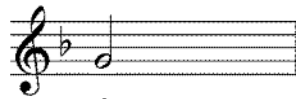


かつしていでよ。  
活出

【 神現祭のコンダク 第4調 】



こうえいはちちとこいとせいしんにき  
光榮父子と聖神歸



す、

しゅよ、なんぢはこんにちせかいにあらわあ  
 主 爾 今日 世界 現

れ、なんぢのひかりはわれらにしるされた  
 爾 光 我 等 印

り、われらなんぢをうけみとめてうとお  
 我 等 爾 承 認 歌

おう。ちかづきがたきひかりよ、なんぢき  
 近 難 光 爾 来

たりなんぢあらわれたまえり。  
 爾 現 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

いまもいつうもよよに、アミン。  
 今 何時 う も よよ に、アミン。

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
 爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
 外 來 者 知 れ ども、ハリストスの

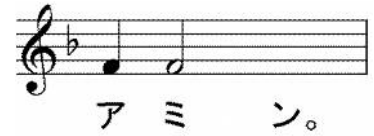
ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことな あし、かれらにか  
 屬 神 子 爲 彼 等 神  
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩 寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たま あえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

司祭) ( 黙誦： <sup>せい</sup> 聖なる神、<sup>かみ</sup> 聖者の中に<sup>せいじゃ</sup> 息い、<sup>うち</sup> セラフィムより<sup>いこ</sup> 聖三の聲を以て歌頌せられ、  
<sup>せいさん</sup> ヘルヴィムより<sup>こえ</sup> 讚榮せられ、<sup>もつ</sup> 悉くの<sup>かしよう</sup> 天軍より<sup>かしょう</sup> 伏拝せられ、<sup>かしょう</sup> 萬物を無より有と  
<sup>さんえい</sup> なし、<sup>ことごと</sup> 人を<sup>てんぐん</sup> 爾の像と<sup>ふくはい</sup> 肖とに依りて造り、<sup>ばんぶつ</sup> 爾が<sup>む</sup> 諸の<sup>ゆう</sup> 賜を以て之を飾り、  
<sup>ひと</sup> 願う者に<sup>なんぢ</sup> 智慧と<sup>ぞう</sup> 明悟とを<sup>しょう</sup> 與え、<sup>よ</sup> 罪を行<sup>つく</sup> う者を<sup>なんぢ</sup> 棄てずして、<sup>もろもろ</sup> 其<sup>たまもの</sup> 救の爲に<sup>もつ</sup> 痛悔  
<sup>ねが</sup> を<sup>ちえ</sup> 立て、<sup>めいご</sup> 我等<sup>あた</sup> 卑しくして<sup>つみ</sup> 不當なる<sup>おこな</sup> 爾の<sup>もの</sup> 諸僕を、<sup>す</sup> 此の<sup>そのすくい</sup> 時に於ても、<sup>ため</sup> 爾が<sup>つかい</sup> 聖な  
<sup>た</sup> る<sup>われらいや</sup> 祭壇の<sup>ふとう</sup> 光榮の<sup>なんぢ</sup> 前に<sup>しよぼく</sup> 立ちて、<sup>こ</sup> 爾に<sup>とき</sup> 當然の<sup>おい</sup> 伏拝<sup>なんぢ</sup> 讚榮を<sup>せい</sup> 奉るに<sup>せい</sup> 堪うる者と  
<sup>さいだん</sup> なしし<sup>こうえい</sup> 主宰よ、<sup>まえ</sup> 爾<sup>た</sup> 親ら<sup>なんぢ</sup> 我等<sup>とうぜん</sup> 罪人の<sup>ふくはいさんえい</sup> 口よりも<sup>たてまつ</sup> 聖三の<sup>た</sup> 歌を受け、<sup>もの</sup> 爾の<sup>もの</sup> 仁慈を  
<sup>しゅさい</sup> 以て<sup>なんぢみづか</sup> 我等に<sup>われら</sup> 臨み、<sup>われら</sup> 我等に<sup>およ</sup> 凡そ<sup>じゆう</sup> 自由と<sup>じゆう</sup> 自由ならざる<sup>つみ</sup> 罪を<sup>ゆる</sup> 赦し、<sup>わ</sup> 我が<sup>たましい</sup> 靈と<sup>からだ</sup> 體と  
<sup>もつ</sup> を<sup>われら</sup> 聖にし、<sup>しょうがいぜんこう</sup> 我等に<sup>もつ</sup> 生涯<sup>なんぢ</sup> 善功を以て<sup>つと</sup> 爾に<sup>え</sup> 務むるを得せしめ<sup>たま</sup> 給え、<sup>せい</sup> 聖なる  
<sup>しょうしんぢよ</sup> 生<sup>こせい</sup> 神女と<sup>なんぢ</sup> 古世より<sup>よろこび</sup> 爾の<sup>な</sup> 喜を爲しし<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人と<sup>きとう</sup> の<sup>よ</sup> 祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋 <sup>けだしわ</sup> 我が<sup>かみ</sup> 神よ、<sup>なんぢ</sup> 爾は<sup>せい</sup> 聖なり、<sup>われら</sup> 我等<sup>こうえい</sup> 光榮を<sup>なんぢ</sup> 爾<sup>こ</sup> 父と<sup>せいしん</sup> 子と<sup>けん</sup> 聖神に<sup>いま</sup> 献ず、<sup>いつ</sup> 今も<sup>よよ</sup> 何時も<sup>よよ</sup> 世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 聖 勇  
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 の 者 の よ、 我 等  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、 )

【 プロキメン 提綱 神現祭後の主日 第1調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅよ、われらなんぢをたのむがごとく、  
 主 我 等 爾 頼 如  
 なんぢのあわれみをわれらにたれたま  
 爾 憐 我 等 垂 給  
 え。

誦經) 義人よ、主の爲に喜べ、讚榮するは義者に適う、

しゅよ、われらなんぢをたのむがごとく、  
 主 我 等 爾 頼 如

な んぢの あわれ みをわれらにた れたま  
爾 憐 我 等 垂 給  
え。

誦經) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>われらなんぢ</sup>我等<sup>たの</sup>爾<sup>ごと</sup>を頼むが如く、

な んぢの あわれ みをわれらにた れたま  
爾 憐 我 等 垂 給  
え。

【<sup>アポストロス</sup>使徒經 224 半端 エフェス書 4 章 7 節～13 節

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup>聖使徒<sup>じん たつ</sup>パウエルが<sup>しょ よみ</sup>エフェス人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup>謹<sup>き</sup>みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup>兄弟よ、<sup>われらかくじん</sup>我等<sup>おんちよう</sup>各人に<sup>あた</sup>恩寵<sup>たまもの りよう</sup>の與えられしは、<sup>したが</sup>ハリストスの<sup>ゆえ</sup>賜の量に循うなり。故

に云えるあり、<sup>たか</sup>高きに<sup>のぼ</sup>登り、<sup>とりこ</sup>擲者を<sup>とりこ</sup>擲にし、<sup>ひとびと</sup>人人に<sup>たまもの</sup>賜を<sup>あた</sup>與えたりと。夫れ<sup>そのぼ</sup>登れりとは、

<sup>かれ</sup>彼が<sup>まち</sup>先づ<sup>もつともした</sup>地の<sup>ところ</sup>最<sup>くだ</sup>下なる<sup>しめ</sup>處に<sup>あら</sup>降りしを<sup>くだ</sup>示すに<sup>もの</sup>非ずや。降りし者は、<sup>かれすなわちしょてん</sup>彼即<sup>よげんしゃ</sup>諸天の

<sup>うえ</sup>上に<sup>のぼ</sup>登りし者なり、<sup>もの</sup>此れ<sup>こ</sup>萬有<sup>み</sup>を<sup>ため</sup>充たさん<sup>かれ</sup>爲なり。彼が<sup>あた</sup>與えし者には、<sup>もの</sup>使徒あり、<sup>しと</sup>預言者

あり、<sup>ふくいんしゃ</sup>福音者あり、<sup>ぼくしおよ</sup>牧師及び<sup>きょうし</sup>教師あり、<sup>せいと</sup>聖徒を<sup>ぜんび</sup>全備せしめ、<sup>つとめ</sup>服役の事<sup>こと</sup>を行<sup>おこな</sup>い、<sup>ハリス</sup>ハリス

<sup>たい</sup>トスの<sup>た</sup>體を<sup>われらみなしん</sup>建てて、<sup>かみ</sup>我等<sup>こ</sup>皆<sup>し</sup>信<sup>ちしき</sup>と<sup>いつ</sup>神の子<sup>せいぜん</sup>を識る<sup>ひと</sup>知識<sup>な</sup>との一なるに、<sup>成</sup>成全<sup>の</sup>の人と<sup>爲</sup>るに、<sup>ハ</sup>ハ

<sup>まつた</sup>リストスの<sup>せいちよう</sup>全<sup>りよう</sup>き<sup>いた</sup>成長<sup>およ</sup>の量<sup>に</sup>に至るに<sup>およ</sup>迫る。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。そこで、こう言われている、「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。さて「上った」と言う以上、また地下の低い底にも降りてこられたわけではないか。降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天



の上にまで上られたかたなのである。そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 洗礼祭後の主日 第5調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

Arieleia, Arieleia,  
Arieleia.

誦經) <sup>しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ った</sup> 主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世に爾の眞實を傳えん、

Arieleia, Arieleia,  
Arieleia.

誦經) <sup>けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた</sup> 蓋我言、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、

Arieleia, Arieleia,  
Arieleia.

司祭) ( 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念  
 の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を  
 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所  
 を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、  
 爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし  
 て生命を施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書8端 4章12~17節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時イイススはイオアンが囚われたりと聞きて、ガリレヤに去れり、ナザレトを離れて、

ザヴロン及びネファリムの境の内なる海濱のカペルナウムに來りて、此に居りたり、預言  
 者イサイヤを以て言われしことに應うを致す、曰く、ザヴロンの地、ネファリムの地、海濱  
 の路にイオルダンの外に在る異邦のガリレヤ、幽暗に坐する民は大なる光を見、死の地  
 及び陰に坐する者に光は輝けりと。是よりイイスス始めて教を宣べて曰えり、悔改せ  
 よ、蓋天國は邇づけり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスはヨハネが捕えられたと聞いて、ガリラヤへ退かれた。そしてナザレを去り、ゼブルンとナフタリとの地方にある海べの町カペナウムに行って住まわれた。これは預言者イザヤによって言われた言が、成就するためである。「ゼブルンの地、ナフタリの地、海に沿う地方、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤ、暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」。この時からイエスは教を宣べはじめて言われた、「悔い改めよ、天国は近づいた」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金ロイオアン聖体礼儀) へ